4.　朗読も必要ではないか

三潴信吾　学校の国語教育について一つ御伺ひします。今の教育が文字とか単語とかを覚えさせることに重点が置かれ過ぎてゐると思ふのです。もっと読むといふことがあってもいいのではないか。昔は意味が解らなくてもともかく読む素読といふものがあった。読書百遍意自ら通ず、といふわけです。外国語にしても、名文とか詩とかを覚えさせたら身につくのではないか。文を読むといふことに重点を置いたらどうでせう。今国語といふのは私の頃は読方といって、教科書にも名文が沢山ありました。さういふ文を読む、書を読むといふことはいかがでせう。

石井　これも全くおっしやる通りだと思ひます。私たちはとかく大人の考へで子供の教育をやってきた。これが誤りの根源だらうと思ひます。実は子供は私たちが喜ぶだらうと思ってやることを一向に喜ばず、反対に、こんなことは喜ばないだらうと思ふことに非常に興味を示すことが多くあります。子供が何が好きかといふことは実際にやってみないと解らないのですが、我々は、大人の頭で考へてこれを決めて一方的に教へてゐます。これがいけないところです。今、三潴先生が言はれたこともその一つで、子供は解らない文章でも喜んで朗誦するものです。私が松下政経塾で使ってゐる『大学』とか『孝経』とかいふ本を幼児に試みに読ませてみましたら実によく読むことが判りました。とても解るわけがない文章を朗々と大きな声を出して読む。子供は朗読が好きなのです。しかも解らない難しいものほど喜んで読むのです。これは私たちにはその理由が解りません。ただ大人と違ひ、解らない文章を読むのが好きなやうに生れついてゐるとしか言ひやうがありません。それで『孝経』とか『大学』とか全体が読めるやうになるまで半年とはかかりません。ですから私は、『大学』『論語』『中庸』といふやうな書物は幼児期の間に頭のなかへ入れてやった方がいいのではないか、さうしておけば一生頭の中にあって、年齢相当の理解が、その時々に出来ていつともなく自然に深まってゆくやうになる、と思ひます。今のやうに言葉の表面だけ解って、ほんとには理解できない年頃に学習させるよりも、全く解らないうちに頭の中に入れておいてやった方が良いのではないか。さうすれば解る時が来れば解るが、今のやうでは、一生その良さが解らないで終ってしまふのではないか。ですから私は、江戸時代の「素読」といふものを是非復活させる必要があるのではないか、と思って居ります。